群馬県大学図書館協議会

会報

からっ風通信

2010 第23号

発行―2010年2月26日
編集―群馬県大学図書館協議会「会報」編集委員会　前橋市荒牧町4-2（群馬大学総合情報メディアセンター内）　TEL.027-220-7178
http://gdtk.lib.gunma-u.ac.jp

松平記念図書館　Matsudaira Memorial Library II

関東学園大学　Kanto Gakuen University

松平記念図書館　Matsudaira Memorial Library II
関東学園大学　Kanto Gakuen University

CONTENTS

■ 平成21年度第1回大学図書館研究会報告 ―― 2
■ 退職に想う ―― 10
■ トピックス ―― 11
■ 第７回群馬県図書館大会・編集後記 ―― 12

平成21年度第１回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修

― テーマ：「図書館資料の分類を考える」　会場：新島学園短期大学 ―

夏季休業期間中の８月25日（火）の午後、本協議会と群馬県図書館協会との共催により標記研究会・研修が、教育者として名高い新島襄ゆかりの新島学園短期大学で開催され、公共図書館の11名、高等学校図書館の４名を含み合わせて37名の参加があった。

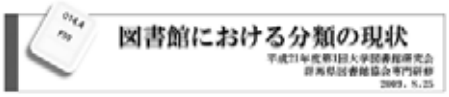
研究会は、テーマを「図書館資料の分類を考える」とし、講師には現在、文教大学越谷図書館に勤務され、日本図書館協会分類委員会に大学図書館を代表して参画、NDC第10版改訂版の編集作業に携わっておられる藤倉恵一氏を迎え実施された。

氏は、「図書館における分類の現状」と題した講演で、インターネットに代表されるICTの進展、及び社会構造の変動に伴う職員体制の変化の中、図書館業務全般の見直しが迫られている現状における「分類」を、現場図書館員の視点、分類研究者の視点、分類提供者の視点から、「分類」の辿ってきた歴史、基本的機能の変遷、及び今後の方向性について分かりやすく語られた。

以下に、本協議会の編集委員会の依頼に応じていただき「会報」本号への掲載用に改めて編集、送付された氏のレジュメを載せる。

図書館における分類の現状

文教大学越谷図書館　藤 倉 恵 一

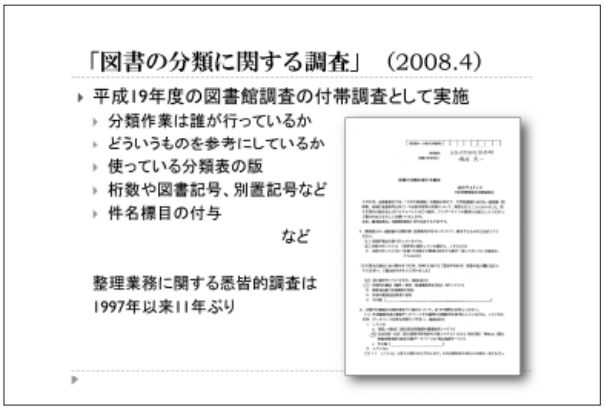


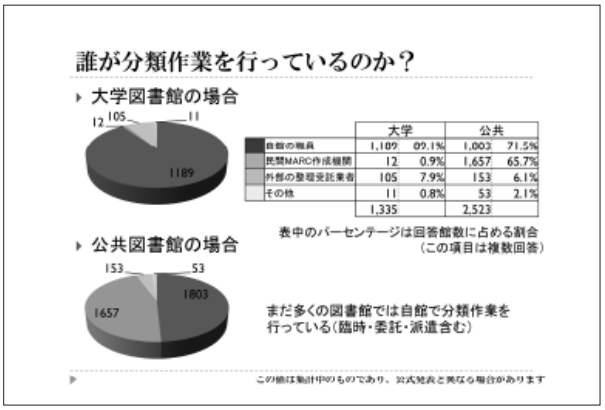
はじめに

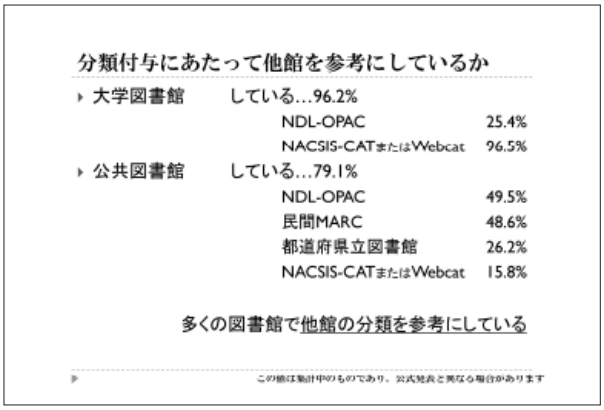
本稿は、2009年８月25日に開催された平成21年度第１回大学図書館研究会・群馬県図書館協会専門研修における講演の資料をもとに、一部補足を含めてまとめたものである。

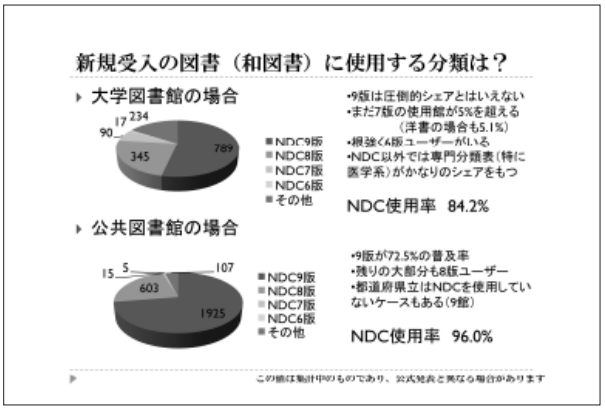
なお、筆者は日本図書館協会分類委員会委員であり、私立大学図書館協会東地区部会研究部分類研究分科会代表であるが、本講演においては私見を交えての発言を含むことをあらかじめご承知おきいただきたい。

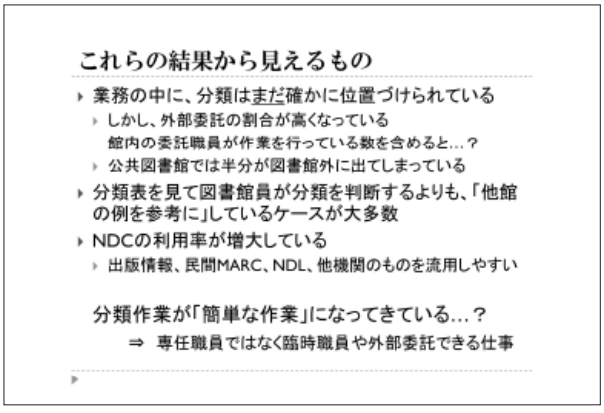
１．図書館の現場における分類の現状 ※



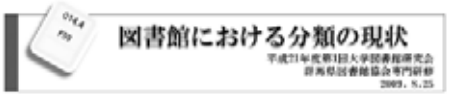








※　この調査結果は大曲俊雄委員により集計され、第95回全国図書館大会第9分科会において発表された。より詳細な集計結果は『図書館雑誌』および『現代の図書館』誌上で報告される予定である。当日の講演においては集計中の資料・数値を使ったため、これら公式の発表とは一部異なる場合がある。



2．分類用語の基礎知識

分類に必要な三要素

- 対象を分類するための「区分原理」（原則・基準）
- 区分される対象である「被区分体」（類概念）
- 区分されたものである「区分肢」（種概念）

- オレンジジュース　とは
  - 「ジュース」という飲み物（被区分体）を
  - 「オレンジ」という素材・味（区分原理）で
  - 分類したもの（区分肢）のひとつである

    ほかの区分肢として「アップルジュース」「グレープジュース」など

    この区分原理では、炭酸入りかどうか、ペットボトルか缶か、内容量、メーカー、販売地域などは区分されない

分類法を分類する：機能による分類

- 書架分類法（shelf classification）
  - 書架に資料を体系的に並べることを目的とした分類法
  - 配架位置は相対的に変化する（棚に余裕が必要）
  - 記号の長さに量的限界がある
  - 1つの図書に対して1つの分類しか付与できない
    （ほとんどの図書館が採用している）

- 書誌分類法（bibliographic classification）
  - 資料・情報を検索するために主題を適切に記号化する分類法
  - 記号に量的制約がない
  - 分類は複数付与することができる

分類法を分類する：構造による分類

- 列挙型分類法（enumerative classification）
  - あらかじめ各項目が表に列挙されている分類法
  - 表に列挙されたものの中から必要な分類記号を選択する
  - 表に列挙されていない主題を分類するのが困難

- 分析合成型分類法（analytico-synthetic classification）
  - 分類対象の概念を分析し、その要素・概念（ファセット）ごとの記号を決められた手段で合成して主題を表現する分類法
  - 概念が正しく分析されていれば複雑な主題でも記号化することができる
  - 習熟に時間がかかる

分類法を分類する：使用者による分類

- 一般分類法（general classification）
  - 知識の全分野を対象にした分類法
  - 一般的な図書館が使用する

- 専門分類法（special classification）
  - 特定の分野を対象にした分類法
    （領域が特化されているため詳細であることが多い）
  - 専門図書館や蔵書群に対して使用する

分類法を分類する：記号法による分類

- 純粋記号法（pure notation）
  - 1種類の記号しか用いない分類法
  - 区分肢の数に限りがある
- 混合記号法（mixed notation）
  - 複数種類の記号を用いる分類法
  - 文字種・文字数が多いので区分肢に余裕がある

- 十進記号法（decimal notation）
  - 十進数字を使った分類法（覚えやすい・並べやすい）
  - 階層構造が表現しやすい（構造がわかりやすい）
  - 区分肢の数は9＋その他（0）であり、これを超える区分の追加が難しい
- 非十進記号法
  - 数字に限定されず記号を用いる分類法
  - 階層構造の把握は容易でない
  - 詳細な主題表現が可能

十進記号の読み方

- Decimal Classification / Decimal Notation

  研究社　リーダーズ英和辞典第2版より

  dec·i·mal /dés(ə)məl/

  ―a【数】十進法の(cf. ―CENTESIMAL); 小数の; （通貨など）1/10 [1/100] 単位に分けられた, 十進制の; 通貨十進制の.

  Vanda Broughton "Essential Classification"（2004）より

  decimal notation（十進記号法）

  分類記号が十進法に細分しているかのように、言い換えると、実在のまたは想像上の小数点に続く、21,212,223,26,35,354,37という順序のように、整理保管している数字表記法。

十進記号の読み方

- 913．6　（日本文学―小説―近代）
  - 数字だと　　きゅうひゃくじゅうさん　てん　ろく　　×
  - 分類法では　　きゅういちさん　てん　ろく

    ␣9136　というような考え方による

    実在のまたは想像上の小数点（a real or imagined decimal point）

  3桁はあくまで順序を示すために調整したものにすぎない

  文学は900　日本文学は910　だが、

  実際は　　9　　91　の意味である

  3桁に調整しないと（大小を表すただの数字だと）

  9（文学）、11（日本思想）、…89（その他の言語）、91（日本文学）

  899（国際語）、901（文学理論）

図書館における分類の現状
平成21年度第1回大学図書館研究会
群馬県図書館協会専門研修
2009．8.25

3．日本十進分類法の概要――十進分類法の成立と現在

日本十進分類法（NDC）の特徴

- 一般分類法である
  - 一般的な公共図書館において十分である
- 典型的な列挙型分類法である
  - 複雑な記号法を持たず、分類作業もそれほど難しくはない
- アラビア数字による十進記号法を用いる
  - 排列順序を容易に指示できる（順序記号法）
  - 数字だけの純粋記号法だから記号を理解しやすい
  - 階層構造がある程度明らかである
  - 区分肢が9つしかないため、区分に限界がある
    （階層構造が理論的に破綻している箇所が散見される）

十進分類法の歴史背景（DDCの歴史）

- 1870年　Melvil Dewey（1851-1931）がアマースト大学補助員時代に作成した分類体系をもとに"Decimal Classification"を発表
  - Harrisの分類体系を参考にした主題排列
  - 画期的な記号法、相関索引
- Deweyの存命中に12版（1927年）まで改訂を重ねる
- 1951年　15版改訂時に31,000項目を4,600項目に大幅削減
- 16版以降　Phoenix（フェニックス：分野ごとの大幅改訂）導入
- 現在　第22版（2003年）
  版を重ねるごとに大規模改訂がある

16版以降、DDCは書誌分類法を志向していく
（配架のための分類ではなく、主題を排列するための分類へ）

DDC13版（1932年）より

- 現在のDDCと比べて簡素な表

それでも
373.243-.249　科目別中等学校
　373.24355　軍中等学校
　（374.24+355 Military Science）
　373.245　科学・技術
　（373.24＋500 Scientific）
373.4-.9は「地理区分」

記号合成により柔軟な主題表現

DECIMAL CLASSIFICATION
373.2 Types of secondary schools
.22 Day schools　Boarding schools
.222 Day schools
.223 Boarding schools
.23 As to organization
.232 4-year highschools
.236 6- "
.236 Junior "
.238 Senior "
.24 As to curriculum
.241 Academic
.242 Clasical
Latin-sci highschools
.243-.249 Other types by subject
.4-.9 Special countries and schools: history, reports, catalogs etc
374 Adult education

DDC22版（2003年）より

- かつてに比べ詳細な表

373　Education　373
.202 Women in secondary education
Do not use for secondary education of young women; class in 373.182332
.09 Historical, geographic, persons treatment
[.093–.099] Treatment by specific continents, countries, localities
Do not use; class in 373.5–373.9
.1 Organization and activities in secondary education
For comprehensive works on secondary education for specific objectives, see 373.011; for comprehensive works on schools and programs of specific kinds, levels, curricula, focus, see 373.2
[.101–.109] Standard subdivisions
Do not use; class in 373.01–373.09
.11–.18 School organization and activities in secondary education
Add to base number 373.1 the numbers following 371 in 371.1–371.8, e.g., professional qualifications of teachers 373.112, secondary education of young women 373.182332; however, for cooperative education, see 373.28
.19 Curricula
Class curricula directed toward specific secondary educational objectives in 373.011; class education in secondary schools identified by specific types of curricula in 373.24–373.26
.2 Secondary schools and programs of specific kinds, levels, curricula, focus

- 細かな主題への対応
- 合成や参照の細かい指示
  Do not use for…; class in xxx
  …についてはこの番号を
  使用せず、xxxに分類しなさい
- ファセット分析手法の導入による主題表現力向上
  （フェニックス実施個所）

DDC主題表現力の進化

- 21版　生命科学（Life Science）の改訂（ファセット化）により

例．マウスの組織病理学＝571.93519353

571.93	病気一般
+5	571.5　組織生物学
+1	571.5-.9に与えられたファセット指示子（Facet Indicator）「571.1　動物」から
+9353	マウス「599.353　マウス」から

- 論文単位でも分類記号の付与ができるようになる
  （20版　音楽、21版　生命科学、22版　数学…）

日本における近代図書分類法の歴史

- 1876年　東京書籍館書目
  - 東京書籍館（日本初の公共図書館）における分類
  - 6部門の分類
  - ブリュネやハリスの分類、四部分類の影響
- 1887～1888年　八門分類表
  - 東京図書館の分類（のちに「帝國圖書館八門式分類表」となる）
  - 戦前まで使用される
- 1909年　十門分類法（山口縣立圖書館圖書分類表）
  - 山口県立図書館長佐野友三郎が八部門分類をもとに拡張
  - DDCの例に倣って100区分とする（構成は別物）
- 1920年代　大阪府立圖書館分類表
  - 数字を使った非十進分類法を試用（1924年時点）

NDCの歴史

- 1928年　もり・きよし（森清　1906-1990）が「圖研究」第1号に「和洋圖書共用十進分類表案」として発表
  - Cutter のExpansive Classificationをもとに主クラスを配置
- 1929年　「日本十進分類法」と改題

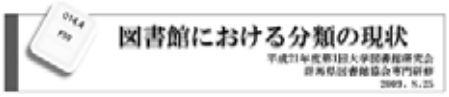
- 1942年までに5版まで改訂を重ねる
  - 縮刷版は第8版（1949年）まで刊行される

NDC5版（1942年）より

- 現代よりはもちろん簡素だが当時としては充実した表
  - DDCのように記号合成による詳細な主題表現手法も

372　教授法，學科過程　Teaching　Curriculum
～以上ノ如ク主分類區分オエル，例エバ：－372.47　植物ノ如ク

5版の縮刷版である第8版（1949.3　實業文藝圖書部発行）より



NDCの歴史

- 戦後　GHQダウンズ勧告「NDCを標準分類法に」
  - 1950年　新訂6版（1951年　新訂6-A版）
  - 1961年　新訂7版
  - 1978年　新訂8版
- 1986年　もり・きよし引退（1990年没）
  - 新訂9版の改訂作業開始
  - 1995年　新訂9版刊行
    - 相関索引の充実、MRDF（データ形式）の頒布
    - 全国書誌を意識した改訂
    - 書誌分類法をめざした改訂

NDC9版（1995年）より

- 現代の出版状況と過去の継続性を重視した項目
  - 参照（を見よ参照、をも見よ参照）の充実
  - 分類小項目（：の後に続くもの）や関連分類項目（注記に記載されるもの）が増加
  - 改訂箇所が見やすく

4．日本図書館協会分類委員会の活動――NDC改訂に向けた動き

日本図書館協会分類委員会（第32期）

- 委員長　那須雅熙（聖徳大学教授；元国立国会図書館　第32期～）
  - 大学教員　3名
  - 国立国会図書館　2名
  - MARC会社　1名
  - 公共図書館　1名
  - 大学図書館　1名
  - 個人　1名　　9名＋事務局1名
- 毎月第2火曜日 15:00～18:00に定例会議を開催（年12回）
- 記録はホームページで公表

NDC新訂10版の改訂作業進捗

- 2002年3月　活動開始（9版の見直し）
- 2003年12月　9版正誤表発表
- 2004年4月　金中委員長（当時）による改訂方針発表
  1、3、4類審議
- 2005年　3、1、8、2類審議
- 2006年　2、3類審議
- 2007年　3、7類審議
- 2008年　7、0類審議
  - 10月　3類試案概要公表
  - 12月　2類試案概要公表
- 2009年　0、5類（部分）審議；1類再審
  - 2月　7類試案概要公表
  - 7月　0類（部分）試案概要公表

これ以外にも、各類で改訂案をまとめた内容を再度審議することもある

NDC10版改訂の基本方針

- 9版の改訂方針を踏襲
  NDCの根幹に関わる体系の変更はしない
  書誌分類表をめざす
- 新主題の追加を行う
  BSH、NDLSH、新刊書の書名の用語などを参考に項目名追加
- 全般にわたって必要な修正・追加などを行う
  論理的不整合はできるだけ修正する
  用語の整備
  他のツールの情報の取り込み
  分類作業が行いやすく，また利用者にも分かりやすい分類表をめざす
  細目表と相関索引の用語，分類記号の整合性を図る
- NDC・MRDF9の本表と相関索引を統合し，分類典拠ファイルを作成

金中利和「日本十進分類法新訂第10版の作成について：JLA分類委員会の改訂方針」
図書館雑誌　98(4)，p.218-219，2004.4 より整理抜粋

改訂作業の進捗について

- 「図書館雑誌」にて3、2、7、0類の試案の概要を公表
  ただし0類については007を除く部分
- 分類委員会ホームページ上で詳細版をPDFで公表
  「雑誌」にはページ数の制約があるのでPDFで補足公開
  必要に応じて改訂を行うことがありえる
- 試案説明会（中間報告）の開催予定
  2009年11月10日（火）13:00～16:30
  日本図書館協会会館

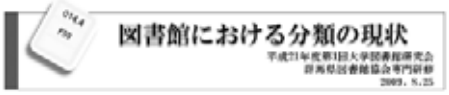
改訂の大きなポイント

- 007.6 と 547/548 の統合検討
  - 9版時代から急速に発展し、出版点数も多い分野
  - どこに、どのように統合するのが最適かはまだ検討中
    008を拡張する案と547/548を整理する案
- 相関索引の充実
  - 9版で別冊になった相関索引21,594語をさらに拡充する
  - 本表中の語で索引語になかったものも積極的に索引へ
  - NDLSHやBSH第4版の語をも積極的に収集

→　索引語データベース化計画（随時拡充の可能性を模索）

分類委員会に関する問題点（私見）

- 改訂作業の遅延
  - 拙速よりははるかにマシではある
  - 時間的制約がきつい（月1回・3時間では審議が進まない）
  - 表の改訂以外にも審議事項が少なくない
- 委員が流動的
  - 平均して年に1人程度の委員交代がある
  - 特に過去の審議結果が効率的に継承されていない
  - 改訂中の委員長交代は過去例がない（日図協の規程上仕方ないが）
- 分類法・表に対して保守的
  - 改訂方針「なるべく図書館に影響を与えないように」
  - 空き番号が有効活用されない
- 改訂試案に対する図書館界の注目の度合いが少ない
  - 試案の概要が意外に読まれていない



5．私大図協・分類研究分科会の活動――NDCを批評・検討する

分類研究分科会の概要

- 私立大学図書館協会東地区部会研究部分類研究分科会
  - 私大図協・東地区部会加盟図書館に所属する図書館員で構成
  - 2年1期、加盟館内の公募により会員組織

【歴史】
- 1954年　私立大学図書館協会関東部会研究会成立
- 1955年10月、研究部常任幹事校、「研究分科会」の設置を承認
  - 17の分科会が設置希望される
- 1955年12月7日　分類研究分科会設立（世話人：立教大学・道村晃氏）

【現在】
- 2004年4月より藤倉が代表者を務める
- 2009年8月現在、会員　7大学7名（個人会員1名含む）

分類研究分科会の活動

- 基本テーマ
  いわゆる図書館分類法だけでなく件名、シソーラス、Indexing理論等を含んだ"トータル"な意味での図書館分類法とその理論に関する研究
- 近年20年ほどの課題
  - H.E.BlissやJ.Millsらの論考が中心（分析合成型分類の理論など）
  - 分類法の性能比較・検証
- 過去4期（8年）のテーマ
  - 2002-2003年度　BC2とNDC9版の性能比較（教育分野）
  - 2004-2005年度　DDC20、21、22版＋13版とNDCの性能比較
  - 2006-2007年度　NDC9版の性能向上試験
  - 2008-2009年度　「分類の基礎」の再発見（図書館分類法に限らない）
    NDC10版試案の検証

分類研究分科会の基本姿勢

図書館学は実学である、とはよくいわれるが…

- 実学と単なる実務との違いがよく理解されていないのではないか
  図書館学は実務処理のための小手先のテクニックを論じる傾向にあった
- 実務を優先し理論を軽視する姿勢が、実は実務がうまくいかない元凶ではないか？
  基礎を固めない実務は、問題に対してアドホク的に対処せざるをえず、すぐに行き詰まる
  J.Mills著，吉田暁史・田窪直規ほか著「資料分類法の基礎理論」序論より

知識の組織化は図書館の基礎である

他団体との交流・連携

- TP&Dフォーラム（整理技術・情報管理等研究集会）の共催
  - 1991年、日本図書館研究会整理技術研究グループが主催
  - 教員・図書館員・業者・研究者など立場を超えて徹底した討議を行う
  - 第4回から分類研究分科会が運営協力、以後共催団体になる
    （現在の主催者は「TP&Dフォーラム実行委員会」）
- 日本図書館研究会情報組織化研究グループ（旧・整研）との交流
  - TP&Dフォーラムなどを通じて関西圏の研究者らとの信頼関係醸成
  - それぞれの50周年記念を相互に表敬訪問（分類2004年、整研2007年）
- 主題文献精読会
  - 分類研究分科会関係有志が設立した研究会
  - 私大図協加盟図書館員に限らず、立場をこえて参加できる
  - 分科会ではできない文献の集中的な精読

当面の活動計画

- 2008-2009年度会期
  - 会期のまとめとなる研究発表会（2009年12月）に向けて
    NDC10版試案の検討・批評を作成
    → JLA分類委員会にも提出する予定
  - NDC10版試案説明会への出席
- 2010-2011年度会期（あくまで予定）
  - NDC10版試案検討・批評の継続（以後公表されるものにつき）
  - NDC10版刊行に前後した総合的な批評
    など

分科会に関する問題点（私見）

- 分類研究分科会に限った話ではないが、
  - 会期が2年であり、継続的な研究が行いにくい
  - 会期中に会員の異動（特に図書館外への転出）があり、研究活動を維持しにくい
    - これにより休会・廃会に至った分科会が既に複数ある
  - 私大図協の東地区部会に所属（事実上関東圏）の図書館員のみというクローズな場であり、分野を同じくする教員や研究者との積極的交流が取りがたい（そういう意味で分類研究分科会は型破り）
  - いまどきの大学図書館員に研究意欲はあるか？　（研究≠研修）
  - 専任職員が漸減する中で、継続的研修や研究に対する職場（上司）の理解が得られがたい　本当はそんなことではいけない！
  - 研修は即効性で実利のあるものばかりが注目され、整理技術などの「地味」なものは敬遠されがち　本当はそんなことではいけない！

6．NDCの現在と将来

NDCの将来は明るいか？

- NDCの利用率はきわめて高い
  - 公共図書館96.0%　大学図書館84.2%
  - 学校図書館　小学校89.7%　中学校92.7%　高校99.3%
    全国SLA研究調査部「2008年度学校図書館調査報告」
    （無作為抽出による）
- 改訂が遅い
  - 版が変わるのに10年以上を要する
  - 改訂審議が始まってから5年経ってもまだ終わらない
  - 図書館界のニーズに応えられていない？？？

NDCの将来は明るいか？

- 区分肢も限界が見えている
  - 十進分類法最大の欠点ともいえる「区分肢が9つ」
  - 改訂では下位の番号を使わざるを得ない
    小規模図書館や公共図書館では分類がしづらくなる
- 改訂方針が保守的である
  - NDCの論理構造に欠陥があることは数十年前から指摘され続けているが、改訂方針で構造の改善はしないと謳う
  - 大きな分類変更をすることで図書館に大きな影響（≒再分類作業や配架変更等）を及ぼすことを避けている
- 「書誌分類法をめざす」ことは果たして可能か？

図書館における分類の現状

平成21年度第1回大学図書館研究会
静岡県図書館協会専門研修
2009．5.25

NDCの将来は明るいか？

- ジレンマの連鎖
  - 館界の利用率が高いから大規模改訂ができない
  - 大規模改訂ができないから分野によって改訂が困難
    やむを得ない対応として桁数が増える
  - 桁数が増えるから現場で不評である
    6～7桁をラベルに印字したくない
    3～4桁では分類できず書架が混沌とする
  - それでも使わざるを得ない
    過去からの積み重ね
    他館例を参考に作業をするから、自館も合わせなくてはならない
    （利用率はさらに高まる）

NDCの将来は明るいか？

- そもそも
  図書館界で整理技術はどのように位置づけられているか？
  - 必要で、重要なものだとは考えられている
    まだ自館の業務の中に位置づけ（特に大学図書館の場合）
  - 他館の分類を参考にするのが当然のようになっている
    コピー・カタロギングが目録作業を経験ある職員の仕事ではなくしたように、分類作業からも高度な専門性は失われつつある
  - 研修・研究のテーマとしては地味にとらわれがちである
    図書館員は即効性のある研修を求めている（？）
    論文が少ない
    実は日本に限った話ではない

分類が持つ可能性

- 現在の分類に関する論文・研究の主流は情報科学領域
  自動分類、画像・映像分類、メタデータにも関連
  ファセット分類も注目されている
- フォークソノミー（folksonomy：自然言語によるタグ付け）の普及
  - ブログやSNS、Wiki、動画投稿サイトなどで急速に普及
  - それと意識しない「分類作業」の実践（市民レベルで）
- 知識の分類は図書館（図書）に限定されなくなっている

NDCの活用可能性（一端）

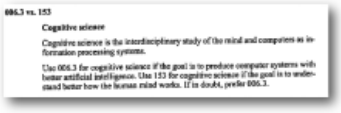
- 図書館が所有する蔵書の分類（の拡張）
  - 分類＝ラベルに印字するもの、という考えは適切でない
    - 請求記号はあくまで書架排列のための記号にすぎない
  - OPACでは多面的な検索ができる
    - 「分類」フィールドを有効活用し、桁数の多い（＝詳細な）分類を付与
    - 複数主題をもつものは複数の分類を付与することもできる
    - OPACの提示順を「分類順」にすることができれば…
- 図書館が発信する情報への付与（メタデータの一部）
  - 機関リポジトリのメタデータ、検索キー、提示順として
  - パスファインダーのメタデータ、提示順として

来るべきNDC11版に向けて（私見）

- 改訂体制の抜本的見直し
  - 月1回、3時間の審議では迅速な改訂作業は不可能
    （メーリングリストのおかげで改善はしているが）
  - 電子的な検討の拡充（典拠データの有効活用）
  - OCLCのような分類専門検討セクションの設置可能性
  - 全国書誌作成機関（NDLやMARC作成業者等）との連携
- 新語・新概念の積極的な導入（語彙数の増加）
  - 随時新しい語が追加されるNDLSHとの連携
  - オンラインによる新語追加（10版ユーザーに対しても？）

来るべきNDC11版に向けて（私見）

- マニュアルの必要性（10版刊行後ただちにでも）
  - DDCは本体（分冊）にManualを備えている
  - 似たような語や役割の番号に関する使用の指針
    - 「Use ***.** for …」 ***.**は…のために使用しない。
    - 「If in doubt, prefer ***.**」 迷った場合は、***.**を優先しなさい。
    - 「See also discussion at ***.** vs. +++.+」 ***.** と +++.+の解説をも見よ。


006.3 vs. 153

Cognitive science

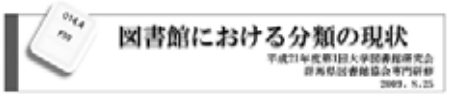
Cognitive science is the interdisciplinary study of the mind and computers as information processing systems.

Use 006.3 for cognitive science if the goal is to produce computer systems with better artificial intelligence. Use 153 for cognitive science if the goal is to understand better how the human mind works. If in doubt, prefer 006.3.

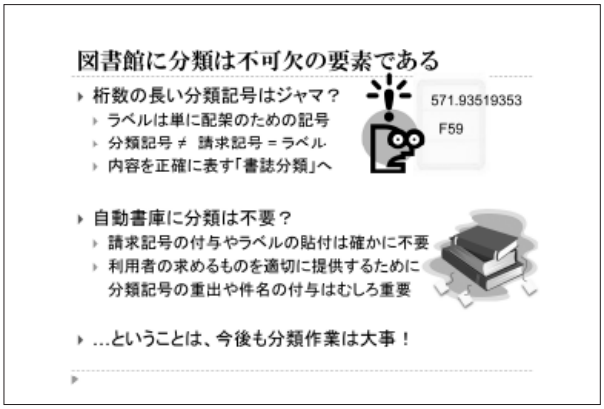
  - NDCにも同様のものが必要ではないか（たとえ別売りでも）

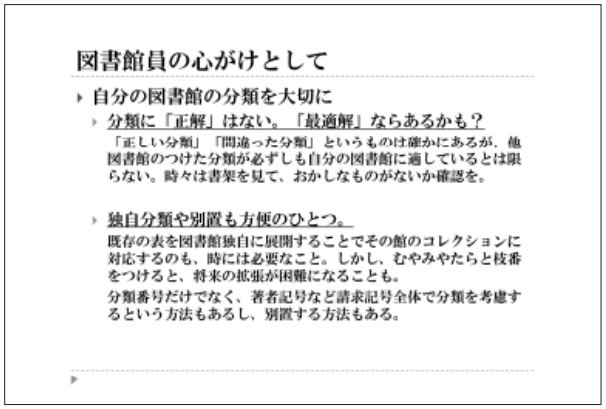
来るべきNDC11版に向けて（私見）

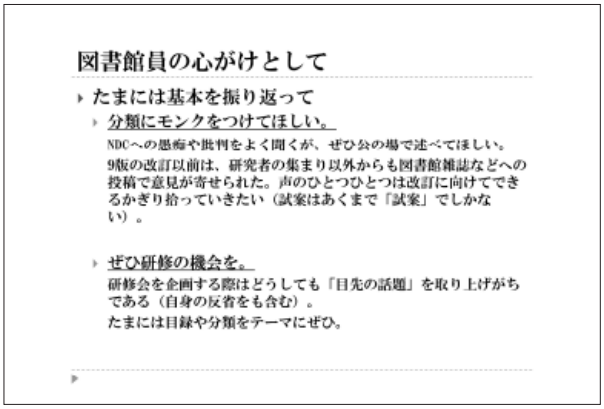
- 分類法の「版が改まる」ということは書誌的な意味でなく、記号法上で階層の追加や変更が行われることである。
- 新しい語を追加したり、古い語を訂正したりする程度の変更は「分類法の改訂」に含まれるものではないと思う。
  （今回公開された改訂試案の中にも多数含まれている）
- NDC10版で採用した名辞も、11版の改訂を待たず時流に合わせ適宜追加・変更すべきと考える。
- 新しい語の位置づけを10版のユーザーに対して随時提供することで、10版を延命できる
  （11版の改訂が次の15年後でも、ある程度の使用に耐えうる？）



おわりに――いまわたしたちにできること







参考・引用文献（順不同）

- もり・きよし原編．日本図書館協会分類委員会改訂編集．日本十進分類法．新訂9版．日本図書館協会，1995.8（ISBN4820495100）
- 金中利和．日本十進分類法新訂第10版の作成について：JLA分類委員会の改訂方針．図書館雑誌．98(4)，2004，p.218-219
- 田窪直規[ほか]共著．資料組織概説．三訂．樹村房，2007.3（ISBN9784883671359）
- 森清編纂．日本十進分類法：和漢洋書共用分類表及索引．第8版．寶塚文藝圖書館，1949.3
- Mitchell, Joan S [et al]. Dewey decimal classification and relative index. 22nd ed. Dublin, OCLC Online Computer Library Center, 2003, 4v. (ISBN 0910608709(set))
- ミルズ，ジャック[ほか]著．田窪直規[ほか]訳．資料分類法の基礎理論．日外アソシエーツ，1997.1（ISBN4816914056）
- Broughton, Vanda. Essential classification. Facet, 2004（ISBN1856045145）
- 藤倉恵一．DDC（Dewey Decimal Classification）の実効性を比較検証する--日本の教育事情に対する付与実験をもとに．私立大学図書館協会会報．126，2006，p.84-89.

加盟館分類法(表)使用状況調査　（平成22年２月実施）

分類法（表）	館数	分類法（表）	館数
NDC新訂第９版	24	NLMC米国国立医学図書館分類法　第５版*1	1
NDC新訂第８版	5	日本看護協会看護学図書分類表　第２版*2	3

＊1　群大　　＊2　健科大、上武大、高健大

退職に想う

退職にあたって

高崎経済大学附属図書館　井ノ口雄久

私の通った小中学校は、境界の無いほとんど同じ場所といっていいような状況で隣接していた。その敷地内で校門をくぐるとすぐ右手に市立図書館があった。（今では、別の場所に移転しているが。）小学校のときから存在は知っていたが、自分とは縁の無いところというように近寄り難い雰囲気ではあった。（もしかすると当時は、小学生は利用できなかったかもしれない。）

私の図書館との関わりは、中学校からであったように思える。印象に残っているのは、山岡荘八著「徳川家康」全26巻？であった。読書というのは、それほど積極的ではなかったと思われたが、正直大変面白かったという記憶がある。どういうわけかその頃から「図書館」というものに興味をもちはじめたのかもしれない。

大学は、４年制大学を選んだが、図書館短大に進もうか悩んだ時期もあった。（そちらに進学していたら、私の生活も大きく違っていたかもしれない。）大学に進んでからも、近くの市立図書館や大学図書館によく行ったものである。読書するためというより、図書館の雰囲気が好きだったのだと思う。

大学をやっとのことで卒業して、一般企業に入ったが、ひょんな事で1979年４月から高崎市役所に世話になることになった。これからが、私の図書館職員人生の始まりである。

市役所で最初に配属されたところが、高崎経済大学附属図書館であった。当時は、目録カードを作成し、利用者がそれを頼りに検索するという今から考えると大変まどろっこしい状況であった。最初の大学図書館時代は、図書館活動を行うというより、大学の職員仲間と一緒に遊ぶことに一生懸命であった。

その後、３年間市庁部局を経験し、1985年４月に高崎市立図書館に異動になった。市立図書館も前年の７月に教育委員会と同居していた建物から現在の場所に移転していた。コンピュータも導入した新しい図書館であった。当時はコンピュータといっても、まだカタカナしか入力に使えなかったが、貸出返却作業は早く、コンピュータの能力を如何なく発揮した。移転前と比べて４倍となった貸出冊数を処理するには不可欠なものであった。

まさに従来の図書館のイメージとは一新された新図書館であった。そこで、移動図書館活動を中心にした活動が始まった。その後、11年間市立図書館で勤務したわけであるが、その間に三つの経験から大きく図書館に対する考え方が変わった。

その一、図書館の隣に公民館があり、公民館活動と連携する中で、図書館とは何かを考えさせられた。公民館活動とつながる事によって、図書館には利用者がいるということに気づかされた。その後の図書館活動の出発点になっている。

その二、司書資格取得である。1990年に図書館情報大学の司書講習で、図書館の基礎を学べたことである。夏の１ヵ月半を寮生活で同じ志の人たちと図書館のことなどを話し合えた事は貴重な経験となっている。

その三、図書館問題研究会への参加である。ここで、公共図書館はどうあるべきかを考えさせられた。特に、衝撃を受けたのは、「中小都市における図書館経営」というレポートと「市民の図書館」という本の存在であった。ここには、公共図書館のあるべき姿と今後の指針が示されていた。活動こそ様々な展開を示してきたが、図書館の理念はここにあると私はいまでもそう思っている。

この三つの経験が、現在の私の大きな財産となっている。（そうはいっても迷ったり、悩んだりしていただけのような気がするが。）

その後、高崎経済大学附属高校図書館を２年経験して、1997年再度市立図書館にもどった。当時の附属高校は、女子高と附属高校の生徒が同居していて、学校としては難しい時期でもあったが、図書館に集まる生徒は明るく自分達で講演会や座談会を企画したりして、一緒に楽しく活動ができた。市立図書館では、残念ながら管理職として思ったような活動はできなかった。大きな出来事としては新館建設に向け様々な検討がなされ、これか

らという時、2007年４月、現在の高崎経済大学大学附属図書館に異動となった。

最後の３年間の大学図書館は、大学が抱える様々な問題はあったが、図書館活動としては、力不足ながら上司、仲間の助けをかりてどうにか過ごしてきた。

役所生活のほとんどを図書館に身を置かせてもらったことは、大変幸運だったと思っている。一体何をしてきたのかという思いも強いが、これからどう生きるかということを今までの職場で学ばせていただいたことは個人的に大きな収穫だと思っている。

これから、新しい生活に入るわけだが、おそらく一生図書館に関わっていくことだけは、確かである。いまさらながら、その感がますます強くなっている。

最後に、多くの図書館関係者の方たちにお世話になったことを感謝申し上げる。

退職に寄せて

高崎健康福祉大学薬学部図書・資料室　本間瑞甫

県大図協の活動の一環として年２回発行している「会報」の編集に微力ながら携われたこと、それにより参考にしたい他館の取り組みなどを知る機会を頂いたことに感謝申し上げます。過去の内容も、とても有用なものです。時折読み返し参考にしています。

大学図書館研究会では、平成18年度第１回「電子ジャーナル入門」(会場：高崎健康福祉大学)、平成19年第２回「インターネット最前線と図書館サービス」(会場：群馬大学）に参加することができました。どちらも、日々めざましく進む「情報」を扱った内容です。情報をインターネットで入手することが日常となり、一般の方でも思わぬところで電子化した書籍と出合っているのではないでしょうか。もちろん電子ブックの貸出、電子ジャーナルやオープンアクセス、機関リポジトリなどを日頃から利用している方も多いことでしょう。反面、研究会などで学んだ知識を更新し、かつ利用者に情報提供できるスキルを積むことの難しさを実感します。

新人として平成17年から５年間勤務させて頂き、その間に電子ジャーナルの導入、データベースの追加、新規HPへの変更など情報ソースが増えたことのほか、いくつもの出来事がありました。それとともに課題も多くなってきています。個人的には、Googleの書籍電子化は図書館サービスにおいて有用と感じていました。ところが、国によっては問題とされているようでニュースでも頻繁に取り上げられ、どのようにサービスすべきか模索しておりました。今後の動向が気になるところではあります。

最後になりましたが、加盟館の皆様、毎回素敵な「会報」をまとめてくださった編集委員の皆様（あまり協力することが出来ず申し訳ございませんでしたが）たいへんお世話になりました。

トピックス　育英短期大学図書館

「しかけ絵本展」の開催

当館では2009年10月31日(土)～11月１日(日)、本学桔梗祭にて「しかけ絵本展」を開催し、当館所蔵のしかけ絵本の内85点を展示しました。

合同企画として館内で行われた、保育学科ゼミによる「おはなしのくに」と合わせて、２日間で約260名の一般来場者があり、ページをめくるたびに驚きにあふれるしかけ絵本の世界を楽しんで下さっていました。

尚、「しかけ絵本展」は当館の恒例企画展であり、この後2010年１月29日（金)まで学内向けに開催、途中作品を入替え、約130点の作品を展示紹介しました。

大会報告

第７回群馬県図書館大会

～ 開かれた図書館　知る喜びを広げる ～

去る11月26日、群馬県立図書館、群馬県図書館協会、群馬県読書推進運動協議会主催のもと標記大会が開催され、延べ参加者数は448人（大会行事・記念講演 280人、分科会 168人）に達し前回の362人を大幅に上回り盛況を呈した。

★**午前の部**　式典　記念講演；諸田玲子氏「小説書くこと　読むこと」

★**午後の部**　第１分科会「図書館の魅力を伝えるために」
第２分科会「本ヂカラを育てよう」
第３分科会「公立図書館と学校図書館との連携・協力」

大会記念行事

記念講演・諸田玲子氏

記念講演全景

第１分科会

第２分科会

第３分科会

編　集　後　記

今年度もこれが最後の「会報」となりました。日々の業務の参考になるような記事内容を、とあれやこれやと編集委員会でも鳩首凝議。次号に向けてご協力をお願いいたします。